



開國文化より見たる堺

京都帝大教授
文學博士

三浦 周行

一、前後二回の開國

我國は昔から歴史上、西洋諸國のために國を開いたことが前後二回あるのであります。前回は即ち足利時代の末期天文年間でありまして、その次は徳川時代の末期、安政年間であります。そしてこの二つの間には夫々異つた事情がある。前回におきましては、我國は中央足利幕府の勢力が衰へ、各地には到る處に守護、大名が割據の風をなして居つて、それらが經濟上自給自足の政策をとり、各自領内の港灣を開放して海外との交通貿易を獎勵し、國民また盛んに海外に雄飛して貿易に従事してをり、中には餘り香ばしいことではないが、所謂倭寇にしても絶えず勇名を馳せて居つたのであります。西洋人がこの時まで渡來しなかつたのは決して我から拒絶したわけではなく、我國の存在を十分に知らなかつたがために過ぎないのであります。然るに耶穌教が初めて傳來してから、我佛敎の僧侶其他のために嫌はれ、迫害をも受け、それが後には西歐との交通貿易を阻止する動機となつたのであります。豐臣氏も徳川氏も初めは禁教許商の方針を取つて、耶穌教を禁じた後までも、貿易だけは徹頭徹尾歓迎して居りました。然るにその次回徳川の末期になりますと、幕府は二百十餘年間、鎖國方針を履行して來まして、ただ和蘭と清國との二國だけが、長崎の一港に於て貿易を許されてをつたが幕府はそれを祖先から授けられたところの祖法であるとして、飽迄も鎖國政策を遵守すべく堅くなつてゐた時代でありました。それで亞米利加、露西亞その他諸國の貿易を要求するところの態度が執拗であればあるだけ、我も頑強にそれを拒否するに全力を傾けたのであります。而かも當時歐米の注意は極東に集注されるに至つたところから、此大勢は到底我國で遮斷すること思ひも寄らず、幕府は心ならずも開國を餘儀なくされたのであつて、これが爲めに幕府は統制上に大きな罅隙破綻を生じ、遂にその轉變を見るに至つたのであります。故に前回の開國は寧ろ國民上下の努力によつて招徠されたものであるが、今回の開國は寧ろ外間の壓迫に餘儀なくされた政府の方針によつて定つたのである。これから私の説かんとする「開國文化より見たる堺」に於て、開國とは足利末期の前回の開國についてであります。即ち堺の住民が當時の

開國文化の上に如何なる役目を演じ、また如何なる奇興をなしたかといふことを精神的、物質的兩方面からしてこれを觀察して行かうといふのが、私の講演の眼目である。それに先きだつて一應當時の堺について概観するの必要があります。

二、堺の發展

堺は昔は海のない京都からして、住吉より堺へかけての美しい海岸の風景を見るために、また堺の海濱には海水を汲んでこれを沸して入浴する鹽湯浴しほゆの出來たために、それから昔より上下の信仰の篤かつた紀伊の熊野權現に參詣する通路に當つてゐるために聞えて居つたのに過ぎないのであります。それが南北朝時代になつてから、堺を領して居つたころの住吉神社の神主の津守氏が宮方即ち南朝方であつた關係上、堺の住民は南朝方に好意を寄せて居つた。それがために足利方に睨まれながらも、吉野の朝廷が西國即ち中國、四國、九州邊りの宮方と連絡をするころの港となり、その次にはまた應仁、文明の間、長く打續いた内亂の際には、東軍に屬してゐたころの細川氏が淡路、四國を領し、和泉國の守護でもあつたために、細川氏方の勢力範圍であつたころから、堺の住民は東軍に味方した。當時の幕府は東軍に擁せられてゐたのであるから、幕府の勢ひによつて、これまで明と貿易をする船の出入りする港になつてをうた兵庫を押退けて、將軍即ち明の所謂日本國王の明へ遣る船、それは甚だ面白くない事ではあるが、その當時は進貢船と名づけられてゐたものを、堺から出す事になつて、堺はますます殷賑を極めるやうになつて參つたのであります。斯様に堺が發展したことはこれは全く堺の住民の努力に依つたものである事を注意せなければなりません。堺は港灣にして、決して自然に恵まれて居つたことはいはない、ただ其住民が機を見るに敏であつて、自分によい機會を見るに、それを捉へて極力進出を圖つたのである。南北朝の戦いくさいひ、應仁の亂らんいひ、何れも戦亂を利用して燃げぶりをしたといふ氣味も實はないでもないがこれはなかなか平凡な腕前で出來る事ではないのでありまして、非常に目先のよくきく機敏であつて、而も實行の勇氣があるものでなければなりません。港にしては最も古く且つ光輝ある歴史に富んだ大先輩の兵庫を排して新進の堺がその地

位に代つたといふ事だけでも、それが異常の努力に負ふところ多かつたのは推測されるでありませう。實に當時の堺の住民は自身遙に海を渡つて、中國、九州は申すに及ばず、琉球から支那、南洋諸國へまでも極めて危険な冒險的な航海を續け、日本國民のため大に氣を吐いて莫大な富を積み、堺そのものを富麗に化せしめました。斯くて堺は市民の主なる者が牛耳を占めて鞏固なる自治團體を作り、彼等に依つて市の行政事務が運轉されて居つたところから、來朝の外國人の目にはそれが一種の共和政治の如くに映じたものを見えまして、ベネチアを聯想させてをります。堺の周圍には今は細い溝にして取殘されてゐる濠の跡がある、その濠は當時は非常に廣く且つ滿々たる水を湛へ一朝事のあつたときには、忽ちいろいろの防禦なきを設けて盛んに防戦に努めました。さうかと思つて、時としては軍隊のために莫大な軍資金の需めにも應じたのであるから、當時暴威を揮つたところの不規律の軍隊も此所ばかりは敵味方を問はず手を着けかねて、市民の御機嫌を占めて居つた。そこで自然に彼等軍隊の間には一種特殊の道德が堺において行はれ居りました。それは軍隊が一たび堺の地へ入ると、敵味方とも互ひに温顔を以て禮讓を守り乍ら挨拶を交換する。而も雙方とも五歩も濠の外へ出づれば忽ち果し合ひをしたといふのであります。これは當時來朝してゐた葡萄牙の宣教師の報告の中に見える。彼等は堺が獨立の都市であつて、軍隊が軍隊として入り得るどころでないといつてゐる。この不思議な現象については我國の記録にも多少似寄りのことを書いたものが無いでもない、例へば堺は弘法大師の高野の門前であるといつてゐたのもそれでありませう。弘法大師の高野の門前といふのは、大師は高野山を開かれてそこで示寂されてをるのであります、大師の深い慈愛に惹かれて、生前敵味方であつたり、又宗旨を異にしたものであつても、悉く皆大師の手によつて救はれるものと思はれられて、高野の奥の院の大師の御影堂の前に數町も續く墓地には武田信玄の墓もあれば上杉謙信の墓もあり、北條氏の墓もある。生前には敵味方に分れて唾み合ひ惡みあつたものが、此御影堂前では仲よく墓を連ねてゐるのは今でも見かけられるでありませう。當時の堺が敵味方を抱擁して、現代の言葉で申さば、中立地帯、無風地帯といふべきところであつたら、高野の門前といつたのであります。左様なところでありましたがから堺には、公卿も安住地として入つて來れば、武人

も入つて来た。後者は殊に戦争に負けたものが、隠れ場所として入つて来るものが多かつたのであります。學者も入つて来れば、歌人も連歌師も僧侶も商賈人も藝人も、あらゆる人々がさながら流れの低きにつくが如くに、この樂天地を目指してやつて来た。佛教側についていへば、日蓮宗の如きは彼の天文五年の法難に遭つて京都の本寺が悉く追つ拂はれたその時に、申合せたやうに擧つて堺へ移つて参りました。これは獨り佛教の僧侶ばかりでなく、耶蘇教の伴天連即ち宣教師の如きも、また同様、これを最も安全なる避難所として京都で迫害を受けたものは堺へ引越して来た。またさういふ意味でなくとも、彼の宗教界の變り者であつた大徳寺の一体和尚や、澤庵和尚、本願寺の蓮如上人等、何れも堺の市民の支持を受けたものである。それだけに市民の間には文化に貢献したのも輩出してをる。彼の南北朝時代に早くも正平叔論語が堺の道祐居士といふ人の手によつて出来た。天文板論語も堺の阿佐井野宗瑞、三體詩も阿佐井野宗禎といふ人の御蔭で板に上され、また韻鏡は堺の普門院の宗仲論師といふ禪僧が板にし、千字文は堺の石部了珊といふ人が出版した、佛書では五燈會元を彦貞が出版し、醫書の方では醫書大全を阿佐井野宗瑞が出版したといふ風に、印刷文化の歴史の上から見ても、足利時代の堺は實に一大壯觀を呈して居るのであります。

三、鐵砲の傳來と普及

斯る状態にあつた堺が、足利末期の西歐諸國に對する開國文化についてさういふ寄與をしたかといふとをこれから述べてみようと思ひます。第一にお話したいのは堺と鐵砲傳來との關係である。足利時代には我國は國內が非常に亂れて、領土の取合ひに餘念がなかつた時である。一方西暦十五六世紀の歐羅巴は、葡萄牙、西班牙の諸國が東洋から南洋へかけてそれぞれ根據地を有つて盛んに貿易を營みつゝ、あつた時代である。それは喜望峰を廻つて印度洋へ出るころの新航路が発見されて、極東の新天地を開拓するといふ一事に注意が集中されたからであるが、就中日本はマルコポーロが金銀づくめの島として、これを歐羅巴に宣傳して居つた處からして、長い間、その發見は歐洲の冒險的航海者の憧憬の的となつてゐたの

であります。ミシゴがその頃葡萄牙人は印度の臥亞に總督府を設け、更にマラッカを占領しました。それから支那に進出する足溜りとして媽港を取りました。この時偶然にも葡萄牙人が我國に漂着して、それが日本と葡萄牙兩國交通の機縁となつたと同時に、我國においても西歐文化輸入の先驅となるの契機を作りました。葡萄牙人の記録を見ますと、西曆千五百四十二年即ち我が天文十一年將軍足利義晴時代に、暹羅にゐた葡萄牙船の乗組員が三人、自分の船から脱走して支那へ行くジヤンクに乗込んだが、海上で風波の難に遭ひまして、或る島へ漂着したのである。彼のマルコポーロによつて傳へられたミシゴの金銀づくめの島といふのは、即ちこれであらうと思はれたといふ事が著しく葡萄牙の航海者の注意を惹き、それからいふものは盛んに我國へ來航するに至つたのであります。これについて我國唯一の記録として薩摩の文之和尚の南浦文集の中に收められてゐるミシゴの鐵砲記一編がある。それに據るに、天文十二年の八月種子ケ島へ百餘人の船客を乗せた大きな船が着いた。それは西南の南蠻種の商人であつて、その主なものを牟良叔舍及び喜利志多陀孟太といひ、彼等は長さ二三尺の鐵筒を携へて居つたといふて、その用法を偉大なる威力を持つてゐる事を説明し、種子ケ島の領主種子島時義が彼等に就いてその用法を學び、堂に入つたといふことが書かれてゐる。この牟良叔舍といふのは、これを葡萄牙の記録と對照して見るに、密航者の一人であるフランシスコ・セイモトであり、また喜利志多陀孟太は即ち葡萄牙のアントニオ・ダ・モタに相當する。そして彼等が手にして居つたといふ鐵筒は鐵砲其物であると言ふ迄もありません。

抑この鐵砲は最初種子ケ島に傳はつたからして日本では鐵砲の事を種子ケ島といつた位であります。それが漸次各地方に傳播し普及する様になつた、その徑路が二つあります。一つは紀伊の根來寺の杉坊、妙算といつた人、尤も本によつては妙算の兄津田算長ともしてあるが、此人が想々鐵砲を求めするために種子ケ島へ渡つた。種子ケ島時義がその熱心に動かされて惜しげもなく其製法を授けたといふのである。今一つはそれより少し遅れる様だが、堺の商人桶屋又三郎が種子ケ島に於てその術を習ひ覺えて、堺へ歸つた後、益々これを練習してその妙を得たから彼に就いて鐵砲を習ひ覺えるものが次第に多くなつた。又三郎は一名鐵砲又三郎といはれ、爾來鐵砲が畿内諸國に普及するやうになつたといふことが鐵砲記に

記されてゐる。扱てこの根來寺の僧徒なるものは不思議な存在で、戰國時代には傭兵になつて各地に轉戦したものである。なかなか強かつたものであるから、諸方から招待されて、彼方へも此方へも呼ばれるといふ風に、引張旗になつて働いたのである。それで職掌柄といつてはをかしいが、鐵砲といふえらい威力のある兵器が初めて種子ヶ島へ傳はつたといふのを逸早く聞込んで、抜目なく真先にこれを傳へようといふ種子ヶ島へ出かけて行つたものでありませう。それが根來へ歸つて來るにその當時、根來山の麓の村に於て鍛冶屋を渡世して居つた堺生れの芝辻清右衛門といふものが居つたから妙算はこれに鐵砲の製造法を傳へました。彼はその後堺へ歸つて盛んにこれを製造したが、同時に大砲も芝辻道逸といふ者が造るやうになつた。清右衛門の子に自由齋といふ名乗るものが砲術家として諸國を遍歴したといはれて居ります。それが又砲術の普及といふに寄與したとが少くなかつたらうと思はれます。一方橋屋又三郎即ち鐵砲又は元堺の外國貿易家であつたが、當時種子ヶ島は琉球、南支那各地方へ渡航する船が碇泊する場所に當つてゐたから、そこに一兩年滞在してゐる間に、舶來の新武器たる鐵砲に興味を有し、鐵砲の製造に砲術の傳授に努めて鐵砲の普及に貢獻したのであります。これは堺が當時全國の商業の中心地として交通の便を占めて居つたから、一旦こゝへ傳はると、それが商品としてもまた砲術としても直に各地へ傳播普及されるに至つたのは當然過ぎるほど當然の話であります。關東の北條家の記録によつて、永正七年に鐵砲が日本へ傳はつたが、その頃小田原に玉瀧坊頼慶といふ山伏が居つて、享祿元年に堺の鍛冶屋から鐵砲を買求め北條氏綱に獻上した。その子北條氏康が堺の鍛冶屋國安といふ者を招いて鐵砲を調へさせ、翌年根來の杉本坊二王坊、岸ノ和田の三人の僧侶、何れは腕節の強い僧兵であつたと思はれるが、これを招聘して鐵砲の指南番に當つたといふことが傳へられてゐる。鐵砲の傳來は天文年間でありませうから、それより前の永正だのいふときは鐵砲が既に傳はつてゐたことは信ぜられないといふのでありますが、その記録によつても、堺から東國へ鐵砲が傳播した事實は恐らく間違ないだらうと思はれる。即ち鐵砲の傳説に依つて堺で鐵砲が製造されたといふことは、堺の鐵砲鍛冶が東國へ鐵砲を普及する上に如何に寄與したかといふことが判る。鐵砲が我國に傳來したために、我國に及ぼした影響は實に顯著でありまし

た。戦術の上からいへば、これまでのやうな一騎討ちの戦争といふことが出来なくなつた。一人だけ前に突進すれば直ぐ
 ポンミやられてしまふからである。勢ひ戦争は隊を作つて軍隊的行動を取るといふことが必要にするに至り、戦術の上に
 改革を齎らした。更に築城術の上からも鐵砲に耐へ得るやうな堅固な城郭を造る必要を生じて、天守閣などが造り出され
 るやうになつた。此くの如く鐵砲の傳來普及は戦術からいつても、築城術からいつても、革新を齎らすことになつたので
 ありますから、諸國の領主達は我れ勝に葡萄牙の商人に就いて成るべく多くの鐵砲を買取るべく互に競争を起したので
 あつて、それがために葡萄牙人に布教の便宜を與へることもあれば、また一方鐵砲をよこさないからいつて、これに妨
 害を加へるこいふのほせ方でありました。その間にはまた勢ひ自分ばかりでこの新銳な武器を獨占して、他には秘密にせ
 んとする風も起らないではなかつた。これは當時の情勢免れないことでありましたらう。そこになるに、芝辻でも又橋屋
 でも、何れも工業家たると同時に商業をも兼ねてゐたから、營業上鐵砲を多く造り、また多く賣らねばならなかつたので
 あつて、顧客は多いほぎよいわけであるから、さしで販路を擴張して行つた。それが鐵砲といふ新武器の普及にこれ位
 役立つたか測り知れないのであります。橋屋の方では後には刀劍をも扱つた見えて、その看板に刀劍の形をあらはし、
 下方に塀橋屋又三郎と彫り附けられてゐるのが残つてをります。芝辻の方はその子孫が現に奈良に居まして、當時の文書を
 傳へて居る。それには三百年來幕府や諸大名や鐵砲製造の注文のあつたことが窺はれるころの貴重な史料が多い。當時
 の鐵砲の製造は漸く葡萄牙製のもの模造することが出来た位のもので、技術は猶ほ幼稚でありましたから、なかなか精
 銳さはいはれなかつたらしい。永祿八年にドン・ジョアウン・ペレイラの率ゐた艦隊が肥前國福田港に入港するに、日本
 人が塀で作られた極く粗末な火繩銃を射つたために、味方の砲兵が殺されたといふことがフロイスの書いた日本史の中
 に見える。これで見るに、塀で製造の鐵砲は極めて粗末なものであつたやうに思はれるが、粗末ながらも、人を殺す力の
 あつたことは掩はれぬ。そしてこれで見ても塀の鐵砲が九州まで行渡つて居つたといふことが實證されるのである。尤も
 先に申した芝辻家の古文書の中にも、幕府や諸大名から、今度納めた鐵砲は、出来榮が宜しくない、爾後は注意せよ、も

しこんな鐵砲を納めるやうでは、今後は斷るこゝにするこいふやうな意味を書かれたものもあり、こゝも技術の精巧であつたこいふこゝは請合はれません。

四、耶蘇教の傳播

次には方面を變へて堺に耶蘇教のこゝをお話する。

極東の新天地は當に西歐の商人に依つて貿易のために開拓されたばかりでなく、耶蘇教の宣教師もまた神の福音を傳へるために努力したのであります。葡萄牙や西班牙の商人の足跡を印した所、影の形に伴ふが如く耶蘇教の宣教師が續いたのである。是迄日本人は艱業婦の後から商人が行くこいはれたもので、これは甚だ感心出来なかつたこゝであるが、それと比較すれば餘程優しであらう。

我國に於ては初めて葡萄牙商人の發見があつてから六年後に、伴天連（ペートル）こいはれた宣教師が渡來した。それが耶蘇會の宣教師にして有名なフランシスコ・ザエリオその人であつた。彼はもゝ軍人にして戦争で負傷し、不具の身になつてから、人世の憐なさをしみじみ感じて、一生を神の宣傳に捧げたイニアチオ・ロヨラを助けて、耶蘇會を創めた。この派は羅馬舊教の一派であるが、これに屬する人々は何れも燃ゆるが如き信仰心をもつて如何なる試練にも堪へ、神の福音を傳へんこしたものであるから、自然熱烈な共鳴者を作り得て一旦舊教を棄てた新教の信者さへ復歸させたほゞであつた。世界的領土擴張に熱中しつゝあつた西班牙、葡萄牙の二國はその版圖の増大に伴つて宣教師を支那日本にまでも送り出し、到るこころで教權擴張にも成功しました。フランシスコ・ザエリオは西班牙の名家の出こして大學教育をも受けた人であるが、ロヨラの教義に共鳴して巴里のモンマルトルの丘の上で耶蘇會最初の誓ひを立てた七人の仲間の一であつて、葡萄牙王ジョージ三世から印度における葡萄牙の新領土の傳道のために十人の宣教師の派遣を申込まれた際、彼もその一人に加へられたのである。この耶蘇會においては、先輩と後輩との間、上級者と下級者との間には軍隊的の統制

が行はれてをうて、上級者の命令には絶対服従を守らなければならなかつた。ロヨラから一度印度派遣の命を傳へられるや彼は直に蹶起してその途に上り、家族にも親戚にも告別の暇なく、はるばる極東指して出發した。その態度は彼將軍の一令に接するや家人にも告げないで直に厩に走り、馬に飛乗つて出發した鎌倉武士の懐がある。彼は印度の臥亞に着く直に布教に従事し、錫蘭、マラッカ等にも赴いて、到る處に教會を創立し、印度のアボツスルといはれた。彼れがマラッカに居た時、我鹿兒島の彌二郎といふ者が人を殺したため國內に居堪らないで出家してアンセイといひ、葡萄牙船に乗つて支那からマラッカに着いたのに會つて、初めて日本の國情を訊いたが、その時ザエリオは日本人が基督教に歸依すべき素質を有つてゐるといふとを直覺し、そして自身が日本へ始めて布教するといふことは神の指示であると思ひ込んだ。アンセイはマラッカから臥亞に行つて洗禮を受けてポールといふ耶穌教名を授つて來たが、ザエリオはその案内によつて、いよいよ日本に渡來する事になつた。彼の同僚は航海の危険を説いてこれを諫止したけれども、彼はこれに耳を藉さず、日本へ赴くために一命を隕すのは寧ろ本懐であるといつて、天文十八年にコスモ・ド・トレ、フェルナンデスの兩人の宣教師を伴ひ、支那の有名な海賊船に乗つて、マラッカを抜し、幾度か危険を冒し乍ら三箇月目に漸く鹿兒島へ上陸してポールの家に落ちつき、それから大村、平戸を轉じて各地に布教したが、だんだん聞いて見るに、日本の眞の王、内裏が京都に在しますこの事に、是非とも拜謁を遂げて日本全國に布教の免許を得たいもの、都を指して上つて來た。天文十九年に一旦山口に落つて布教し、それから或港より船に乗つて堺に向つて行つたのである。この時船中で日本人の一人の有力者から彼の我國の事情には通ぜず、殊に貧しき様子に同情されて、堺の知人目比屋屋慶なる人に紹介状を書いてもらつた。この人は京都へ行きたがつてゐるから、堺から京都へ行く人があつたならば、さうかこの人を同伴させて欲しいといふことを頼んだのであります。斯くて日本における耶穌教の開山たるザエリオが中央近畿地方に第一の足跡を印したのは實に堺でありました。堺では了慶の家に引取られましたか、此人は堺の櫛屋町に住んで居つた富豪の一人である。その邸宅はよほぎ手廣く、當時としては珍らしい瓦葺で而も三階でありました。その家族のもの例へば子供は服装がよいひ

躰け方ごいひ、またお客の應接振りなき、全く王侯の子息かと思はれる程であつたごいはれてをる。ここに暫らく滞在して居つた後、身分の高い人で京都へ行くのがあつたから、その人に同伴されて、堺から京都迄の十八哩を走り乍ら附いて行つたさうであります。さりながら京都に着いた後、彼の期待は立派に裏切られた。皇室は式微を極めさせられ、將軍義晴は威力なく、部下に襲はれて、京都に居地らす近江に避難してゐた位であつて、堺に根據を置いた三好長慶なきが頻りに羽振りを利かせて居つた、これでは京都に居つても仕方がないご見切りをつけるご、同時に、また當時我國における最大の勢力は山口の大内氏である。ごを悟り、滞在僅に十一日で堺へ歸つて來ました。流石に時勢を達観するの目は高い。こゝでは又了慶の世話を受けたごご勿論でありませう。此人はザエリオが堺を去つてから後も宣教師を保護し、遂に自身は固より家族までも信者ごなつたのであるが、その種子はザエリオによつて播かれたのであります。ザエリオは京都を去つてから、今度は臥亞の總督が日本の王に贈れごいつてよごしてあつた見事な贈物を、山口へ持つて行き、總督の使者ごして大内義隆に會つてこれを呈した。その内にはいろいろの珍らしいもの、例へば晝夜二十四時毎に鳴る鐘ごいふのがあつた。それは時計の事である。絲のないのに琴のやうに四調子十二調子を出すごころの機械ごいふのもあつた。それはオルガンである。老人ごいへごもこれに對すれば物を見るごご少壯の如しごいはれたものがある。それは老眼鏡である。さういふ種々の不思議千萬な贈物をしたから、義隆も悉く感服してつて、領内における布教の免許を與へた。山口における彼は盛んに活躍を續けて、日本最初の基督教の寺院である大道寺を建て、多數の信者を得たが、その中には外國人の宣教師を扶けて日本における耶蘇教の弘通に多大の寄與をしたごころのイルマン・ロレンソごいふ人もある。この人は基督教の大説教者ご褒め稱へられた有名な日本人の牧師で、小西行長もこの人が改宗させ、信長、秀吉もこの人の説教ばかりは喜んで聽いたごいはれてゐる。ザエリオが日本に居つたのは僅に二年ご四箇月に過ぎなかつたが、彼はその間多くの諸大名の家に出入して佛教の僧侶から堪へ難き迫害を受けながら、よくこれに處して、あらゆる階級にその教義を植付け、日本における布教の礎石を掘ゑ付けたのであります。私は先年歐洲へ參りました際、ザエリオが最も活躍したマラッカに上陸

しまして、彼が死んでからその遺骸を臥座に移すまでの間埋葬されてあつた墓地の跡を弄しました。更に巴里においてはマンモトルの丘の上で耶蘇會創立の爲め、其開山もいふべきヨロヲを初めザエリオ等七人が最初の誓ひを立てたころの跡を訪ねましたが、數年前には又山口において、ザエリオの記念碑除幕式が行はれた際に、獨り耶蘇教といはず、我國に西歐文化を移入するに貢献したこゝの多い斯人のために記念の講演を試みたのであります。今またここに諸君の前でザエリオの日本における業績を述べるに當つて、一層思ひ出の深いものがある。

ザエリオが支那に向けて日本を去つた後にはトルレス、ガスベル、ボレラ、フロイス等の宣教師が相繼いで來朝しまして、京都を初め近畿地方に布教して居りました。京都においては永祿四年に初めて南蠻寺が建てられ、繪旨を賜つて公然布教を許されましたが、その後永祿八年から又迫害が加つて、繪旨をもつて放逐され、ボレラ、フロイスの兩宣教師が堺に逃げ歸つて參り、此地を以て近畿における布教の足溜りいたしました。堺においては前に申した了慶が受洗してサン・チヨミいつてゐるので、兩人はその保護の下に、彼れの屋敷にかくまはれました。了慶は實に耶蘇教に取つては堺切つての大檀那であります。しかし耶蘇教は繪旨によつて追はれたのであるから、堺においても、さう大びらに布教することは許されません。了慶はその住んでゐる櫛屋町にさゝやかな家を借りて兩人を住まはせました。そこでは晝間でも蠟燭を點けなければ物が見えない、雨が降るに雨もりが酷いから、家の内を逃げ廻らなければならぬ。それでも彼等宣教師の爲めにこれだけの家を借りて與へたさいふ事が非常な厚意にして感謝されて居りましたものの、兩人の宣教師は遂に熱病に取つたかれて長い間病床に就いた。彼等が備つてをつた日本人の従者は、一人は無斷で逃げ、一人は斷つて暇を買つて出て了ひ、集つて來た信者も、これではやり切れないといつて、夜分は海岸へ出て新鮮な空氣を呼吸することにしてゐたさいふ。新鮮な空氣を呼吸する杯は當時の日本人として一寸考へられぬことであつたから、やはり兩人の宣教師から教へられたことでありませう。斯様に窮屈な家の中にあつても、彼等はそこに教壇を設けて僧侶や市民の迫害にも堪へながら、熱心に説教して行きましたから、三百人以上も受洗者を得たさいはれてゐます。またボレラはフロイス・サンクトールム

(聖者の花) その他二三の本を日本語に譯しました。フロイスも數冊の日本文の本を葡萄牙語に譯したり、日曜、祭日の福音書や、その他二三の傳記をも翻譯し、戒律を日本語で書く杯、彼等の勞作が此陋屋の中で出來たといはれてゐますがそれが今頃世界のまことに傳はつてゐるかまだ判りません。彼等は堺に留つて絶えず京都へ歸る機會を窺つて居ます中に、耶蘇教に好意を有つて居つた信長が京都へ入つてから、信者の一人で信長の部下であつた和田惟政の盡力で、勅許を得て京都へ歸るまことが出來たのであります。なほその頃のまことであるが、内裏の顧問で身分の高い公卿達が惟政に向つて堺から京都へ行く間にある關所、それはこの時分よく諸方に設けられて通行人から關稅を取つたのを、信長の時になつて、そんな不都合なまことはないといつて、これを差止めてしまつた、その關稅を徵收する權利を自分達に與へてくれるやうにま申出たので、それに對して惟政はフロイスが天皇に拜謁するまことを許され、先に耶蘇教に反對した朝山日乘に内裏から賜つた宣教師の追放、會堂の奪取命令が撤回されるまことに盡力されたならば、交換問題として公卿方の希望を叶へて上げようま申したけれども、公卿達は一人ましてこれを内裏に執奏するまことをせなかつたので、彼等は遂にその目的を達しないでやんだといふまことがフロイスの日本史の中に見えてをります。

堺はかやうに耶蘇教にまつては縁故の深いまところでありまますから、堺の土地に立派な一つの會堂を設けたいといふまことは彼等件天連の切なる望みであつたが、何しろ堺といふまところは、今日は附近の町村を併合して大きくなつてをりますけれども、昔は濠で仕切られてあつたから、今程廣くはなかつたものである。その狭いまところへもつて來て、家が澤山建て込んでゐるから、應永の大内の戦には一萬軒の家が兵燹に罹つたまいはれてゐるぐらゐる、澤山な人口が狭いまところにうぢやうぢやをつたものま見えます。その結果まして、價が非常に高價であつたから、よい土地を買ひ求めて教會堂を建てるまといふ目的が容易に達せられなかつた。それがオルガンチノといふ宣教師が堺にまゐつた時に、漸やく市の中央部に土地を求めて立派な教會堂を建てるまに成功しました。尤も地所は極めて狹隘であつたから、その建物は大きくはなかつたけれども、餘程意匠を凝らした美しい建物であつて、屋上高く建てられた見事な大十字架は遙か離れた海上からもこれを望

むこぎが出来たといはれます。そしてこの會堂は四つの寺院の間に建てられてあつたから、彼等宣教師は「堺の町にゐる悪魔に對しておかれた基督の最初のシンボルである」といつてをつたひ書いてゐるのであります。悪魔は言ふ迄もなく僧侶の事でありませう。

かやうに堺において耶穌教の布教が行はれたけれども、佛教徒の妨害があつた上に、市民は耶穌教に入つたら世間が何んといふだらう杯に名譽心に驅られて入信するものが少く、ために多數の信者を得るこぎが出来なかつた。而かも此地で信者になつたものは、質において、實に選ばれたる信者であつたを申して、彼等はみづから慰めてゐたのであります。それで徳川幕府が耶穌教を嚴禁してその信者に迫害を加へる事になつてからは、この堺からも、耶穌教徒たる塵を以て、その財産を沒收されて追放處分を受けたものが二百餘人も出たこの事でありませう。

五、外 國 貿 易

次に堺と外國貿易について述べませう。

葡萄牙人の偶然なる日本發見からして、葡萄牙の商船は毎年の如く九州地方へ來航致しましたが、西班牙の商船もまたこれに次いでまゐりました。然るに當時における葡萄牙及び西班牙の商人は甚だしく基督教の宣教師の掣肘を受けたものであります。最初ザエリオが鹿兒島にまゐつた時は、領内に布教を許した島津氏が、後には冷淡になつて布教を禁じたからザエリオは葡萄牙の商人に説いて薩摩の港へ船を着けるこぎをやめさせました。それから後、同國の商船は平戸や豊後の港へ入港する事になりました。豊後の大友宗麟は熱心な耶穌教信者でフランシスコといふ耶穌教名を有つて府蘭と署名し、F. P. C. O. といふ羅馬字を刻んだ印判を使用してをつたはせてあつた。その後平戸の松浦氏が領内で教徒に耶穌教徒に激烈なる衝突を來したところから、宣教師に退去を命じたので、その時まゐつてをつたコスモといふ宣教師がやはり葡萄牙の商人に説いて平戸に碇泊するこぎをやめさせ、横瀬浦に船を着けるこぎになつた。これには松浦も大變弱つた

から、フロイスが松浦に「さきに基督教の宣教師に迫害を加へたのは、甚だ悪かつた、以後は左様なことを致さず、布教に十分の便宜を興へる」と陳謝をさせ、そしてその商船をまたもこの平戸へ着けることに致した事があります。

天文十八年ザゼリオがまた鹿兒島にをつたころ、十一月五日附で、マラツカのベートルロ侯に送つた手紙が残つてをる。それにはザゼリオがすでに京都を見た葡萄牙商人から京都の状況を詳しく聞いたことを書いてをりますが、それを見ましても、當時の葡萄牙の商權擴張と耶穌教の布教との間に頗る密接なる關係の存在を物語つてをります。ザゼリオはその書状において、堺についてかういふことを書いてをる。「都を距ること二里ばかり（これは間違ひですが）泉州に堺といふ帝國第一の市場がある、この町にさうかデウスの加護によつて葡萄牙國公使の駐在する權利を日本に求めると同時に、印度及び歐羅巴から舶來の貨物を納める倉庫をこの町に建てたる許可を請ふがよろしい、それからこの最も繁昌な中央市場において日本國內の珍貴な金銀細工や天然の産物類と漸次貿易事業を開きたいものである、次には日本國民との交際を親密にするがために、日本國王に告げて、印度迄日本國の公使を派遣するやうにして、公使が親しく印度の開港場につき商業の實況を目撃して歸國の上、日本國民に向つて貿易の利益を説かせ、通商條約の草案を示してこれに同意をさせ、日本國王と印度副王との間に條約を締結させるがよろしい、斯くして日本と葡萄牙との條約が締結出来るといふことになる、葡萄牙の國庫の損失を防ぐがために、堺港に税關規則を設けて關稅徵收の途を立つべきである」といつてをる。この意見書は一見全く通商事務を取扱ふために、海外へ派遣されてゐる商務官の報告を見るやうであるが、これが伴天連ザゼリオの報告であるからかしい。彼はこれまで葡萄牙が海軍をもつて極東に領土を擴張し、世界の大半を掌握するにいたつたことを禮讚してゐる。領土の擴張、貿易の隆盛、宗教の弘通といふことはともに離るべからざる密接の關係をもつてゐるものであるといふことをザゼリオは確かに是認してをつたものと看做さなければならぬ。この意見書はザゼリオこそまだ堺を見てゐなかつたのでありますが、京都や堺を見た同國商人の話を傳聞して意見を立てたものであります。これに依つて見ますと、葡萄牙人の觀察眼に映じた當時の堺は、實に帝國第一の中央市場として最も繁昌してゐた今日の大坂の

如き商業都市であつたから、そこに葡萄牙國の公使を駐劄せしめ、税關を設けて、歐羅巴から舶來したところの一切の貨物を以て日本の物産工藝品と貿易を開かうといふことを計畫したのであります。もしもこの計畫が實現されて居つて、そして鎖國も行れなかつたならば、京都に近いだけに、堺は長崎以上の一大貿易港になつたに相違ありません。

しかし堺の商人は決してゐながらにして外國の商人の來るのを待つて貿易をしてをつたものではない。前述の如く自ら進んで九州、琉球、支那、南洋等の各地へ出掛けて行つて、行く先きさきで葡萄牙、西班牙などの商人を相手に、盛んに商取引を行ひ、莫大の利益を収めてゐたのであります。實に當時にあつては危険極まる航海を物ともせぬ冒險的貿易家として是等の各地に活躍してゐたものであります。これがために安南、暹羅、呂宋などに上陸して居留し、いたるところに他の同胞と共に日本村——日本の居留地——を作つてゐたものを見えます。信長は政略上から耶蘇教を保護しましたが秀吉にいたつてはこれを抑へながら、商人のわが國に渡來することを、むしろ歡迎してゐたのであつて、彼が印度副王に答へた書翰の中にも、わが國が國內平安であるから商人を容赦すやうにいつてゐるのであります。彼はわが國の大名や商人の海外へ渡航することを獎勵したのであつて當時堺からも伊豫屋——伊勢屋と書いたものもある——といふ商人が船を出してをつた。家康も同様、渡海朱印を出して海外貿易を許したが、堺からは大黒屋助左衛門が大泥へ、皮屋助右衛門が東京へ、木屋彌三右衛門が暹羅、東埔塞へ各船を出し、その木屋は暹羅から使が幕府に參つた時に通辯をしてゐます。また豆葉屋四郎右衛門は東埔塞へ、西類子は呂宋へ渡航を許されてゐる。これらの商人はいづれも幕府の特許の下に近世の初頭に於て盛んに南洋貿易を行つたもので、中には西類子の如きははじめは耶蘇會とは別派のフランシスコ派に屬してをつたのであるが、後には日蓮宗に改宗して、法名を宗真といひ、幕府のために國情偵察の任を帯びて出掛けてをつたといはれてゐる。すなはち耶蘇教の陰謀を探る一種のスパイでありました。

斯様に公然幕府の許可を受けてゐたものの外に、さういふ手續をしないで出掛けてをつた私貿易家もまた多く堺から出てゐたやうであります。今その一二の例を挙げますれば、堺の正法寺の塔頭蔡華院の寶物に釋尊降魔成道の圖といふ

のがある。これは長さ十三尺八寸五分、幅四尺九寸で、中の畫面の長さは十一尺一寸、幅三尺四寸といふ素晴らしい大幅であります。その上の方には釋尊が修行してをられるところを描き、下の方には半裸體の魔女の躍つてゐるところが描かれてゐる。裸體畫はこのころからして、すでに來てあつた見ええるが、頗る特色に富んでゐるものであります。これは寛文元年に當時暹羅にをつた堺の人中村彦左衛門が前記蔡華院の檀家であつたが、本國に於て両親の亡くなつたといふとを聞いて、その冥福を祈らなうため、鎖國時代歸國が許されぬから、遙々便船に託して長崎までこの暹羅で描かれた佛畫を送つて來たのを、偶長崎に來合はせてゐた堺の油屋長兵衛といふが、これを持歸つて中村の親戚に當る人と思はれる綿屋大兵衛に渡し、綿屋が更に蔡華院へ納めたものが、この大幅であります。萬里の波濤を越えて參つた珍らしい大幅のこゝでありますから、時の堺奉行石川土佐守に願出でてその許可を受け、寛文元年正法寺の佛殿に掛けて開帳したところ、これを聞き傳へた民衆が群集して非常に有難がつたといふこゝが、その幅の裏に細かく書きつけられてをるのであります。中村はいふまでもなく寛永の鎖國後までも暹羅に残つてをつて、本國へ歸らなかつた一人で、うっかり歸れば死刑に處せられるから、歸るにも歸られず、暹羅に留つたものである。しかし歸國は許されなければいふれども、本國の親類に音信を通ずるこゝは特に許可されてをつたからして、かやうに本國の両親の果てたこゝを傳へ聞いて、その冥福を祈るがためにこの大幅を本國へ送つて寄越したのでありませう。

今一つ述べたいのは堺の實業家柳原吉兵衛氏の先代具足屋のこゝであります。具足屋の本家は代々次兵衛と申しまして安南、暹羅の貿易に従事してをりました。これも鎖國後延寶年間の幕府の調査に據りますと、安南の西京の廣南にあつた日本町に生殘つてをつたものが男が四人でをつたが、其中の一人に具足屋次兵衛もありました。此事は通航一覽に載つてゐる。こゝろが廣南に程近いフエといふところの共同墓地に今なほ殘つてゐる日本人の墓の中に、一つ「柏考文賢具足君墓」に中央に彫りつけ、その横に年號はないけれども、己巳年仲秋吉立といふ文字のあるものがある。思ふに具足君は具足屋の事、己巳といふは延寶元年より十六年後に當る元祿二年のこゝで即ち具足屋次兵衛その人でありましたら

う。それからまた先般同じ堺の發光院といふ寺から偶然にも暹羅佛が一體發見されましたが、それにはその台座の裏面に、「具足屋相傳之天道佛」ミ彫附けられてゐます。すなはちこれも是足屋の先代が暹羅から持つて來た佛體であらうと思はれますから、堺市民の祖先の海外發展史を飾るころの一つの貴重な遺品でありませう。

元龜天正のころには葡萄牙の商船もこの堺に入港したらしいのであります。我國には南蠻屏風ミ稱するものがよく諸家に藏されてゐますが、これは大抵慶長、寛永のころに、日本の畫家の筆に成つたもので、南蠻船の出船すなはち本國の港を出帆するころミ、入船すなはち日本の港へ碇泊したころミの光景が描き出されてゐるのである。日本のこの港は堺であるともいひ、また長崎であるともいはれるが、いづれも確證といつてはない。ミころが私が見ましたもの一つに、如何にもよく當時の眞を傳へてをり、殊に堺の特殊な濠を描いてゐる點において、確かにこれは堺の港を描いたものミ覺しきものがあります。その原本は不幸にして大正十二年の東京の大震災に焼失して今はないけれども、その焼けない前に撮つて置いた寫眞が残つてゐる。それからまた焼けない前にその原本の一部を寫したものが、もミ東京の渡邊修二郎氏の所藏であつたのを私が仲介して、堺市に譲つてもらふことに致したのであります。これは實に多くの南蠻屏風のある中でも比類のない頗る特色に富んだもので、家屋の構造ミいひ、貿易の状態ミいひ、よく當時の堺を思ひ起させる上に、支那人や葡萄牙人や日本人が入混つて盛んにダンスをやつて親善振を遺憾なく發揮してゐる場面もあつて、貿易時代の堺の盛況を偲ぶ上に餘程の參考になる面白いものであります。

葡萄牙人はかやうに堺を商業地にして夙に着目してをつたのであります。和蘭人もまた堺の商業には餘程注目してをつたやうで、慶長十六年和蘭人の使節スベックス及びベーター・セゲルソンがかの英國人キリアム・アダムズの案内で商業視察のため堺に來たことがあります。その當時恰も葡萄牙のメンヒオル・ザントフォールトといふ人が、堺の沖で難船して堺に碇泊してゐたので、ザントフォールトに逢つて、彼れが仔細に觀察した堺の習慣等についての報告を聴取り、非常に満足して、彼等使節は懇々堺に來た甲斐があつたミ喜び合つたことがモンタヌスの日本誌に書かれてゐます。

しかしながら秀吉が大坂に城を築きまして、城下町を經營する事となりましてから、これに隣接した堺を抑へて只菅大坂の繁榮を圖り、堺から貿易に熟練な商人を引つ張つて來たりして堺の繁榮を奪はうと致しました。これがため貿易港としての堺の運命は絶たれて了つたのであります。殊に徳川幕府になつてからは、耶穌教禁止の方針から、外國貿易にも制限を加へ、つひに長崎一港に限つて了まつた後は猶更の事であります。慶長八年、長崎に葡萄牙商船が漂着しましたが、我國ではそれに楨込んだ澤山の生絲を買取るこゝが出来ない。家康は日本國內の産業を發達させるために、この生絲を賣うてやれと命じたから、堺の豪商が京都および長崎の豪商と組合つてこの生絲を澤山買込んだ。爾來鎖國令の行はれた後にいたるまでも、いはゆる白絲割符といつて、生絲貿易についての特權を堺のを始め是等各地の商人等に與へられて了つたこゝは、貿易時代の堺の底力に依るものと謂ふべく、堺が近世に於て大いに氣を吐いてをる一事であります。

六、西歐文化の移入

次に堺における西歐文化の移入についてお話ししようと思ふ。

堺がかやうに西歐文化の門戸となつたと同時に、西洋の科學や工藝その他の技術、文物の傳來したこゝも少くなかつたのであります。かのはじめて堺に足跡を印したザエリオはその説教の中に交へて、この地球は圓い球である、これが晝夜を分たずぐるぐる廻つてゐるといふ地球の運行のこゝや、天文の話、ミウして雨が降り、ミウして風が吹くかといふやうな説明をしたこゝろ、日本人が非常に感服して傾聽してをつたといつてをります。また堺で傳道したフロイスは布教の傍ら醫藥をもつて貧民の救済に力を盡し、信者もこの方面から増加したといはれます。當時の堺には耶穌教主義の慈善病院が建てられてをりました。行長の親のドンルイーの如きは死に臨んで「ミウか五十人の患者を收容するとの出來る病院を建ててくれ」といふとを遺言したといはれてをります。當時ヨフォ・ポロロといふ堺きつての教養ある一人の醫師が受洗した事は宣教師アルメーダの書狀に見える。それらが機縁となつたのでありませう。堺にはいはゆる雨齋流の醫術が傳は

り、就中堺の商人吳服屋安右衛門と島田清庵——即ち百姓善五郎——の兩人は、いづれも南蠻流の醫法を學び醫を業としたものであります。また銅から銀を抜出す法も當時南蠻から堺へ傳はつたらしい。天正前の作の銅器の毀れたものを見るにかならず銀が交つてゐる、これ日本人が銀と銅とを溶解する術を知らなかつたからであるといはれてゐます。天正十九年堺に來てゐた南蠻の商人が住友壽濟といふものに銅から銀を抜くところの方法を授けたのが銀銅分析法の始めであつて、それが南蠻吹であるといはれる。あるひはこれは白水といつた支那人から傳へられたからして住友家は白水といふ字を一字にして屋號を泉屋と稱してゐたといはれるけれども、これは間違で、やはり南蠻吹の名稱の示すが如く、南蠻の商人から授けられたといふ方が尤もらしい。泉屋といふのはそれが和泉の堺で傳授を受けたといふことを記念せんがために國の名を附けたものと見た方がよからうと思ふ。この事に限らず、一體支那と南蠻とはよく混同される。それは南蠻人といはれる葡萄牙人や西班牙の人がよく自國の產物とにも、その出先きの印度や支那の產物をも日本に傳へたものであるからである。すなはち足利時代において移入された高貴な毛織物は歐羅巴で出來たものである、また印度產の木綿の織物、支那の生絲および絹織物といふやうなものが皆葡萄牙や西班牙の商船に載せられて日本へ來てゐる。天寶絨といふ言葉も葡萄牙語であれば、羅紗とか金巾、更紗も今でこそ日本語として使はれ、それぞれ漢字を當てられて、さも日本固有の言葉であるかの如く思はれてはゐるものの、その實さうではない。堺のミ屋といふ商人が堺で教へて織らせたものにモノルがありました。これ杯もその織り方は西洋のそれを傳へたものでありませう。斯ういふ風に堺でも支那や西域から種々の工業を傳へたものと見えるのであります。

秀吉のころ、呂宋の貿易品のうちには壺があつて、呂宋壺といひ、當時茶人の間に大いに珍重されてつたのがそれです。其頃納屋助左衛門が呂宋から日本へ五十個の壺を輸入しましたが、秀吉の世話で、諸大名へそれぞれ高價な値段で賣り附けたために、彼れは一時に巨萬の富を重ねたといはれてゐる。壺成金でも申しませうか。堺の大安寺はその助左衛門が建立したといはれてをります。また堺には妙國寺の有名な蘇鐵であるとか、久しい舊家にあるポルカすなは

ち備^{そな}へていふやうな熱帯植物からよいちよいち残つてをりまして、それらも南洋貿易の隆盛であつた時代に將來されたものではないかといはれてをります。

七、結 語

これを要するに、わが國が足利時代に歐洲諸國に向つて開放されました開國時代において、堺は光輝ある歴史を有つてゐるのであります。精神的文化に致しましては、耶穌教のわが中央部における布教の門戶ともなり、足場ともなつたものは堺である。宣教師が迫害を受けて京都から逐はれてから數年の間安住の地を定めたところも堺である。その間の堺は實に日本の中央部における耶穌教布教の策源地となつてゐたのであります。信者の數においてこそ多くはなかつたけれども、彼等はいづれも選ばれたものであつたことは前に述べた通りであります。堺において宣教師は數々の著譯をなしてゐるが、それが今日傳はつてゐたならば、此種の業績にあつては最初のものとして表彰するに足りたであらうませう。また耶穌教以外の西洋の學問、藝術であるとか、工業であるとかいふやうなものも、一たびこの地に入つて來てから、漸次京都を始め全國に普及したのであります。京都の西陣織の如きもその一つであらうと思はれます。そのほか物質的文明としては鐵砲が堺を通じて東西各地に普及され、武器、築城術の進歩に多大の寄與をなしたことをまつ擧げなければなりません。海外貿易によつて歐羅巴、印度、南洋、支那各地の産物を移入し、わが國の眼界を廣くし、趣味を向上させたことも十分にこれを認めなければなりません。これらは皆、當時の堺の商人の力によつて獲得されたものであつて、彼等の中に本國が鎖國の國策を決した後までもなほ外國に留つて歸らなかつたものがあるのであります。これは歸らうとしても歸られないからでもありましたらうが、しかし遠く本國に離れて僅に通信を許されながらも異國の土になつた人々の心事は悲壯といはなければなりません。

あれだけの富を積み、あれだけの力をもつてゐた堺の住民が、政界、軍界に雄飛するにいたつたならば、定めし目覺し

き働きが出来たであらうと思はれませう。軍界においては、身を薬屋から起して二十四萬石の大名となつた小西行長があります。行長は熱烈なる耶蘇教の信者であつて、かの關ヶ原役後捕はれて死を勧められても、自分はクリスチャンであるからして、教義の上から許されぬところの自殺は斷じてしないといつて、三條磔の露を消えたといふことは有名な話である。しかも彼はその堺時代の本業の薬屋といふことを何時までも忘れないために、薬袋をもつて旗幟してをつたのは床しい心意氣ではありませんか。

堺が一軍人として、また一大名として行長を出しただけであるのは、この光輝ある土地の歴史に取つて甚だ物足りない感があります。彼等堺の住民は一般に政治上の野心を持合せてゐなかつた。その富をもつてさういふ方面に散じたかといへば、有名な高僧を保護した。堺から出て大徳寺へ出世した禪宗の高僧は大抵堺の市民から物質上の補助を受けてゐる。彼等はまた茶道についての造詣が深く、巨萬の資を投じて高價な茶器を買ひ、この道にかけては、信長であらうが、秀吉であらうが、また家康であらうが、全く對等の交りをして來た。かの曾呂利新左衛門——これは鞘師でこの人の作つた鞘はソロリと納るこいつたところから曾呂利新左衛門といはれたこの事ですが、本姓は松本——この人は狂歌輕口に長じ、茶こか香こかを嗜み、實に多趣味な男であつたらしい。太閤が傍のものが如何程諫めても、いつかな承知せず、自身朝鮮へ渡つて唐、南蠻までも乗取らうと毎日々々御渡海々々々といつて傍のものを手古摺らせてゐた時、曾呂利がこれを諫めんがために、「太閤が一石米を買ひかねて今日もこかひ明日もこかひ」を詠んだ。五斗買を御渡海にもちつたものであります。太閤はかねて氣に入りの新左衛門の事ではあるが、苟くも自分のこきを「太閤がこき呼び捨てに致さすは怪しからんこいつて怒つたから、新左衛門は「あ、左様ですか、貴方ご君（天皇）をこちらが御偉いのです」を聞きますから、太閤、「それはいふにや及ぶ」「それならば天子様でさへ君ヶ代を呼び捨てにするではありませんか」を申ししたので、這の太閤もギャフンとまるつたといふ。輕口では太閤までも茶化し切つてゐる。それから日蓮宗の坊さんより還俗して堺の薬屋になつた隆達、これは薬屋の片手間が後に本物になつた隆達節といふ小唄をはじめて、文祿のころから懸

川の寶水ごろまでも中央から地方へかけてちやうどこの安來節の如く凄じい勢で流行つたものであります。堺の物持は茶でも飲んで煙草を吸ひ、いい氣になつて「花が見たれば芳野におりやれの、よしのの花は今が盛りぢや」といつたやうな隆達節を謡つて打ち興じてをたものが多かつたらしく、それがまた天下取なきには目もくれぬ堺商人の身上であつたやうであります。

當時旭日昇天の勢で中原を手に入れた信長でさへも、都人の直後堺に巨萬の軍資金を覬謀したが、堺の商人はきかないそこで直ぐ大兵を差向けようとするに、堺の商人は浪人等を手馴づけてゐたから、例の廣い濠に逆茂木杯を盛に立て、又鐵砲の用意をもして、何時でも來いといつたやうな凄じい勢を見せたものだから、流石の信長も齒軋りしながら一時出兵を思ひ止つたことがある。さてその信長は將軍義昭を擁立して都に入れた手柄を、義昭から褒められて、お前はわしの父だ、「父織田彈正忠殿」に崇め奉つた御内書を出されお前の願なれば何でも叶へてやらう、副將軍でも、管領でも、領地が欲しいれば領地もやらうといはれたところ、信長は何れも固く辭退したが、ただ堺と大津、草津——これらはいづれも當時の盛んな商業都市——そこに代官をおいて自分の直轄地に致したいと申して許され、堺をその直轄地にしてつたぐらゐる、堺は信長に垂涎されてゐたのであります。秀吉も堺には随分手古拙つた見えて、堺の繁榮を大阪へ奪つて行くには、堺の命脈を断たなければならぬ、それにはあの周圍の濠が邪魔であると思つたか、濠を埋めろといふ殿命を出しました。ところが何分廣大な濠の事にて埋築はなかなか容易のことでない。何を愚圖々々してゐるかといふので、秀吉自身出馬して監督しながら、忽ち埋めて了りました。當代の堺の市民は政界、軍界から超越して茶湯たきか小唄たきか種々な遊びに耽つてゐましたものの、一般に富み且つすべてに満足な地位を占めてゐましたため、傲慢にして氣位の高かつたことは、そのころ來朝中の宣教師もこゝろこしく言立ててゐるところであります。かの氣骨稜々たりし一代の宗匠千利休が秀吉から今なほその真相がよく判らない疑問の死刑に處せられ、死後には父その首を獄門に逆懸されたといふことは何程かこの間の微妙な消息を傳へてゐるのではありますまいか。

それは兎に角、私が以上に述べましたところだけでも足利時代末期の開國文化を説かんとするには、さうしても堺といふ十地を除外してはこれを語るべきが出来ないぐらゐ、堺は同期の開國文化にまつて動かすべからざる主要な地位を占めてゐた事は略お判りになりましたらう。

—昭和四年三月二十四日—

昭和四年十一月十五日印刷
昭和四年十一月二十日發行

開國文化(定價二圓)

複製を許さず

著作兼發行
兼印刷人

大 道 弘 雄

大阪市北區中之島三丁目三番
地株式會社朝日新聞社

大阪市北區中之島三丁目三番
地株式會社朝日新聞社

印刷所

大阪朝日新聞發行所

發行所

大阪市北區中之島三丁目三番地

株式會社 朝日新聞社